

なお、「設置」の意味をももつのは、「さげる」と「た
らす」であることは、記して注意を喚起しておきたい。
はじめに掲げた表Ⅰには「設置」の意味の場合に関与
的な素性が含まれており、このまとめでは、その分、
簡素になっている。

言語経歴：1952年5月愛知県海部郡生まれ。

翌年より22歳まで名古屋市南区。
23歳～ 東京都目黒区。最近、横
浜市神奈川区へ転居。

付記：本稿は、1976年11月24日中本ゼミの演習で発
表したものに加筆し、修正をほどこしたものであ
る。 (1979・3・17)

うめる・うずめる

加藤和夫

1. 「うめる」と「うずめる」序

「うめる」と「うずめる」は漢字を用いて書く場合、
一般には、いずれも「埋める」となる。例えば、次の
ような二つの、小説からの引用部分がある。

(1) 王子は鳥の娘を娶り、死んだのちは陵に埋めら
れたのである。(三島由紀夫『潮騒』)

(2) 「歯の治療をするなら、お金をあげますからね」
「金で埋めていいですか」(徳田秋声『彼女と少
年』)

(1)(2)の下線部(下線筆者)を見て、我々は普通それ
ぞれを「うめられた・うずめられた」…(1)、「うめて・
うずめて」…(2)、のいずれで読むだろうか。

(1)では、「うめられた」「うずめられた」のどちらで
も特に抵抗なく読めそうである。しかし、(2)の方はや
はり「うめて」と読むべきところではないだろうか。
なぜなら、(2)は歯の治療についての場面だから、削っ
た歯の穴に金(gold)を詰めるのだと考えられ、それを
「うずめて」ではおかしくなる。「うめて」では歯全
体を金で覆ってしまう意に解されるし、もし実際に穴
も含めて歯全体を金で覆うとしたら、通常は「かぶせ
る」が用いられるところであろう。

また、次の(3)は明らかに「うめる」としか読めない
例として挙げることが出来よう。

(3) かけ先を残らず使ひ込み、それを埋めやうとし
て…(樋口一葉『にごりえ』)

もっとも、このような例(「欠貝をうめる」「赤字を
うめる」などもこれと同様の使われ方と考えられる)
では、充てられる漢字は「埋」より「填」の方がふさ
わしいようであるが。

そしてさらに言うならば、普通、漢字「埋・填」な
どが用いられず、かつ「うめる」のみが有する用法と
して(4)のようなものがある。

(4) あつといへば水をうめ、ぬるいといへば湯を

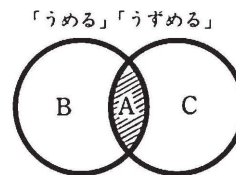
うめる。

(式亭三馬『浮世風呂』)

ただし、私自身の内省では、湯に水を入れてぬるく
する場合を除いて、ぬるい水に湯を加える時に「うめ
る」とは言えない。ところが文献では、味などを薄め
るために他のものを混ぜ入れる意の「うめる」も確認
される。

(1)~(4)の例文で「うめる」「うずめる」の意味・用法
の一端をかいま見ると、類義語としてかなり接近した
関係にあることがわかる。しかし意義特徴として多く
重なる部分を持ちながら、その一方で、同時に意義特
徴の差違截然たる部分のあることも予想されてくる。

今、「うめる」「うずめる」二語の有する意義を、そ
れぞれに、いくつかの意義特徴の集合(束)として捉
えた場合、その関係は、二語にのみ限って言えば次の
様な概念図によって示し得るであろう。



この場合、先の例
文(1)はAの部分に、
(2)(3)(4)はBの部分に
相当するものと解釈
される。では、Cの

部分に相当する例はないかと見てみると、次の(5)など
がそれにあたると考えられる。

(5) ソファーに身を埋(うず)めてダラリと手を両
脇に垂れ…。(国木田独歩『日の出』)

さて、以上の如き「うめる」「うずめる」の意義特徴
に関する大まかな把握の上立って、従来のこれら二
語に対する意味記述をも参照しながら、次により詳細
な分析を試みたい。

2. 他動詞文における構文の種類

自他の対応で言えば「うめる」「うずめる」は他動詞
とされ、それらに対する自動詞は、それぞれ「うまる」

「うずまる」と考えられる。今、他動詞「うめる」「うずめる」の意味分析をしようとする際、当然、自動詞「うまる」「うずまる」を無視することはできないが、ここでは便宜上「うめる」「うずめる」に絞って分析を進める。

「うめる」「うずめる」の用いられる他動詞文は、構文的にはどのようなものがあるだろうか。具体的な分析において、例文の受ける制約（言える・言えない等の）が、単に語的レベルのものか、構文上の問題なのかといった点をはっきりさせるためにも、この点をまず整理しておきたい。

- (i) (N₁ガ・ハ) N₂デ N₃ヲ うめる／うずめる。
- (ii) (N₁ガ・ハ) N₄ニ N₃ヲ うめる／うずめる。
- (iii) N₁ガ・ハ N₃ヲ うめる／うずめる。

N: Noun (名詞)

「うめる」「うずめる」の用いられる構文には、普通以上の三つが考えられよう。ここで(i)(ii)(iii)のそれぞれに相当する具体的な例文をひとつずつあげておく。

- (6) 息子が 菊の花で お棺を うめる／うずめる。
- (7) 息子が 庭に 宝石箱を うめる／うずめる。
- (8) 土砂が ふもとの町を うめる／うずめる。

もちろん、(6)が構文(i)に、(7)が構文(ii)に、(8)が構文(iii)に相当するものであることは言うまでもない。

さて、ここで(i)(ii)(iii)の構文中のN₁~N₅の性格を明らかにしておくならば、N₁は動作主、N₂は手段、N₃は対象、N₄は場所をそれぞれ示すものと言えるであろう。ただし、N₁とN₃については、その使用される構文の種類により、具体的内容を異にする場合のあることに注意したい。

(6)~(8)の例文で言えば、(6)(7)におけるN₁は明らかに動作主であるが、(8)におけるN₁は動作主であると同時に、対象をうめる(うずめる)ための手段としての性格をも併わせ持っているものである。もしここで、(8)のN₁に(6)(7)のN₁と同様に人間を入れた場合には、それは既に構文(i)として処理されるべきものとなる。(9)がそれである。N₂(=手段)に相当するものは省略されていると見る。

- (9) 私が 地面の穴を うめる／うずめる。

つまり、動作主であり、かつ手段であるN₁が来た場合に、構文(iii)が構文(i)(ii)とは区別されるものとして立てられるということにもなる。

一方、N₃については、構文(i)では対象そのものというよりもその対象の持つ空間、例えば(6)で「お棺(の中)」の空間、(9)で「地面にあいた穴」という空間を表わす場合が多く、構文(ii)ではN₄(=場所)をうめる

(うずめる)対象物そのものを表わし、構文(iii)は、それらのいずれの場合も考えられる。

こうして、構文の種類とその各々に現われる名詞の性格について整理ができてくると、既にいくらかは「うめる」「うずめる」二語の意味分析に踏み込んだ気がするが、次章以下でそれぞれの構文ごとに、さらに細かく二語の意味・用法を検討することにした。

3. 分析

3.1. (N₁ガ・ハ) N₂デ N₃ヲ うめる／うずめる。

…構文(i)

構文(i)でN₁が動作主、N₂が手段、N₃が対象であることは既に述べたとおりである。以下、この構文に相当すると考えられる例文を列挙する。ただし、以下の例文ではN₁(=動作主)は全て人間であり、特に明示しなかった。

- (10) 花で お棺を うめる。
- (11) 花で お棺を うずめる。
- (12) 土砂で 穴を うめる。
- (13) 土砂で 穴を うずめる。
- (14) 人で 会場を うめる。
- (15) 人で 会場を うずめる。
- (16) 粘土で すき間を うめる。
- (17) 粘土で すき間を うずめる。
- (18) 金で 歯(の穴)を うめる。
- (19)[?] 金で 歯(の穴)を うずめる。
- (20) 砂で 庭先を うめる。
- (21) 砂で 庭先を うずめる。
- (22) 土で 人を うめる。
- (23) 土で 人を うずめる。
- (24) 水で 湯を うめる。
- (25)^x 水で 湯を うずめる。

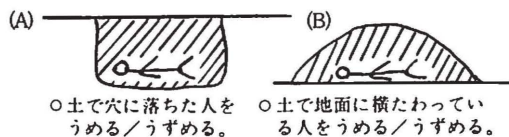
cf. 人から借りた金で 使い込みの穴を うめる。

^x 人から借りた金で 使い込みの穴を うずめる

(10)~(25)の例文中、(18)(19)については、既に徳田秋声『彼女と少年』からの引用文(2)について述べたことと一見矛盾するかのようであるが、(2)では、「金で埋めていいですか」という文で「うずめて」と読むと、明らかに「歯」そのものを対象とするかの如く理解されるため言えないとしたのであって、(18)(19)のように「歯(の穴)」とした場合は、対象が穴という空間となり、(13)に似たものとして「うずめる」も全く言えなくはないように思える。ただ現実非常に言いにくいという事実は、普通そのような歯の治療の場面では、「金で歯(の穴)

を「うめる」という表現が定着していることと、金でとった型をすっぽり穴にはめ込むといった特殊な状況によるものと考えられる。

(22)~(25)は、その点で、 N_3 (=対象) が、「人」「湯」というふうに対象物そのものである例だが、特に(22)(23)では、下図(A)に示されるような場面では言えるが、下図(B)のような場面ではやや言いにくい感じがする。



もちろん、(22)(23)で「人」を「木片」といったものに変えても同様である。

では、なぜこのように(A)と(B)における言い易さの差が生じるのか。これは、構文(i)における N_3 (=対象) が、対象物そのものではなく、それが有する空間、あるいはそれを含んだ空間といったものを要求していることから生じる事実と考えられる。(A)においては、見かけの対象は人であるが、実際には、その人がいる穴という空間の方が強く意識されているのではないだろうか。

もっとも、(B)に類する場面として下図(C)のようなものを考えると、いくぶん言いにくさが解消するのは、「うめる」「うずめる」行為というよりも外見上の差—(C)は外見上(A)と同様のものとなる—が原因しているであろう。



(24)(25)については、やはり例文(4)のところで既に触れたように、「うめる」のみが持つ用法で、「うずめる」との意味的差異を考える上で示唆的であるが、「湯」という具体的対象物を取り得ることに関しては、構文(i)におけるやや例外的なものとして扱っておく。

従って、この(24)(25)を除いては、構文(i)において「うめる」「うずめる」は殆ど同義で用いられていることがわかる。(24)(25)については、「3.5. 派生的用法その他」であらためて言及する。

3.2. (N_1 ガ・ハ) N_4 ニ N_3 ヲ うめる/うずめる …構文(ii)

この構文における N_3 (=対象) は構文(i)におけるそれとは違い、具体的対象物である。そして構文(i)で N_3 として立ったものが、この構文では N_4 (=場所) となってくるものがある。

3.1.の場合と同様、構文(ii)に相当する例文をいくつかあげてみよう。やはりここでも N_1 (=動作主) は一

般に人間であるので省略する。

- (26) お棺に 花を うめる。
- (27) ×お棺に 花を うずめる。
- (28) 穴に 土砂を うめる。
- (29) ×穴に 土砂を うずめる。
- (30) ×会場に 人を うめる。
- (31) ×会場に 人を うずめる。
- (32) すき間に 粘土を うめる。
- (33) ×すき間に 粘土を うずめる。
- (34) 歯の穴に 金を うめる。
- (35) ×歯の穴に 金を うずめる。

- (36) 庭先に 砂を うめる。
- (37) 庭先に 砂を うずめる。
- (38) 土の中に あきかんを うめる。
- (39) 土の中に あきかんを うずめる。
- (40) 畳のすき間に ボール紙を うめる。
- (41) ×畳のすき間に ボール紙を うずめる。

(26)~(39)までは、3.1.におけるいくつかの例文の N_3 を N_4 に、 N_2 を N_3 に置き換えたものだが、3.1.では「うめる」「うずめる」ともに言えたもので言えない例が出てくる。(26)~(29), (32)~(35), (40)(41)は「うめる」しか言えないものである。

例えば(27)が言えないのは、(10)(11)のように「お棺の中」 (=場所) に花を入れたのでは「花をうずめる」ことにならないことによる。この場合の花 (=対象) は、さらにその上を何か別の物 (=手段) で覆われる必要がある。よって(42)の如き例文は可能であろう。

- (42) お棺 (の中) に 花を 土で うずめる。

(30)(31)については、「人をうめる/うずめる」場所を「会場」という空間でなく、次の(43)のように「会場の地下」とでもすれば可能な表現となる。

- (43) 会場の地下に 人を うめる/うずめる。

この段階で、構文(ii)においては「うめる」「うずめる」がその対象物を何か別の手段を用い表面から見えない状態にするという意義特徴を持つことが予想されてくる。ただこのことは、その他の例文を検討した時点で「うずめる」のみに言えることであるのに気付く。(26)(28)(32)(34)(40)の例を見、その状況を想定すれば、それは明らかである。

つまり、これらの例からは、「うめる」の方では、構文(ii)において〈ある場所に対象物を入れ込む〉⁽¹⁾⁽²⁾という意義特徴こそが抽出されるべきで、「うずめる」のように〈対象 (物) を何か別の手段を用いて表面から見えないようにする〉という意義特徴は、その状況の類似から付随的に現われ得る—構文(i)における例文(10)(12)(13)

(16)(18)(22)および構文(ii)における例文(36)(38)などがそれに相当するが、絶対に必要なものではないことがわかる。

ここで、構文(i)における「うめる」の意義特徴も併わせて示すとすれば、〈対象の持つ空間をある手段で満たす〉とでも記述されよう。

なお、構文(ii)に相当するものとしては、「うずめる」のみ言えるとして既にあげた例文(5)や、それとほぼ同種の用いられ方をしていると思われる次の様なものがある。

(44) ×腕を拱んで、顎(あご)を襟に 埋(う)めて…

(45) 腕を拱んで、顎(あご)を襟に 埋(うず)めて…

(二葉亭四迷「浮雲」)

(46) ×ハンカチに 顔を うめて 泣く。

(47) ハンカチに 顔を うずめて 泣く。

(48) 男は 女の豊かな胸の谷間に 顔を うめる。

(49) 男は 女の豊かな胸の谷間に 顔を うずめる。

これらは、あとで述べる「うめる」「うずめる」の派生的(比喩的)用法の一種と見られるものであるが、(45)(47)(49)が言えるのは、先にも述べた「うずめる」の意義特徴(中心的意義特徴と考えられ、もし「意義素」と言われるものをたてるとしたら、ほぼこれに近いものとなるであろう)、〈対象(物)を何か別の手段を用いて表面から見えないようにする〉の派生によるものと理解され、それぞれ「顎(あご)」「顔」が「襟」「ハンカチ」「女の豊かな胸の谷間」によって表面または外から見えなくなる。

一方、例文(44)(46)が言えず(48)が言えるという事実は、これも既に述べた構文(ii)における「うめる」の意義特徴〈ある場所に対象物を入れ込む〉によるものと考えられる。「襟・ハンカチ」では〈対象物を入れ込む〉余地がない。ただ(48)も、場所にあたるものが「女の豊かな胸の谷間」であるから、自然な表現として受け入れられたが、これが偏平な男の胸となると、まさに比喩的な表現としてでなくてはすわりが悪くなる。

(50) ?女は 男の胸に 顔を うめる。

(51) 女は 男の胸に 顔を うずめる。

3.3. N₁ガ・ハ N₃ヲ うめる/うずめる

…構文(iii)

構文(iii)で、N₁が動作主であると同時に対象を「うめる/うずめる」ための手段でもあること、N₃が対象の持つ空間を表わす場合と対象そのものを表わす場合の二通りあることは、例文(8)と関連して前に触れておいた。

これまで同様、(8)も含めて、この構文に相当する例文をまずいくつかあげてみる。

(8) 土砂が ふもとの町を うめる/うずめる。

(52) 雪が 福井の町を うめる。

(53) 雪が 福井の町を うずめる。

(54) 泥流が 盆地を うめる。

(55) 泥流が 盆地を うずめる。

(56) 火山灰が 洞爺湖畔を うめる。

(57) 火山灰が 洞爺湖畔を うずめる。

(58) 大勢の人が ホールを うめる。

(59) 大勢の人が ホールを うずめる。

(8)および(52)~(59)の例文では、構文(ii)におけるような「うめる」と「うずめる」の意味・用法の差は積極的には見い出せない。つまり、構文(i)における二語の関係同様これらの例文では、ほぼ同義で用いられているとしてよいだろう。

例えば(52)(53)の例文で想定される状況は、「冬の雪が福井の町に降って、その町並を白く覆う」場面であって、二つの動詞によって導びかれる状態に変わりはないと思われる。にもかかわらず、もしわずかなニュアンスの違いをそこに感じ取るとすれば、それはやはり二語の持つ意義特徴の差がそこに反映しているからであろう。

(8)(52)(54)(56)(58)の「うめる」の場合、本来対象である「ふもとの町・福井の町・盆地・洞爺湖畔・ホール」を、動作主であり手段である「土砂・雪・泥流・火山灰・大勢の人」が満たすことにポイントがあり、(8)(53)(55)(57)(59)の「うずめる」では、対象である「ふもとの町・福井の町・盆地・洞爺湖畔・ホール」を、動作主であり手段である「土砂・雪・泥流・火山灰・大勢の人」が覆い、表面から見えないようにすることにポイントがあると考えられる。しかし、構文(iii)においては、そういう二語の意義特徴の差も、結果的には、ほぼ同じ状態を生じさせていることがわかるのである。

3.4. 「うめる」「うずめる」における手段の制約

ここで言う手段とは、構文(i)におけるN₂、構文(iii)におけるN₁をさす。

3.2.および3.3.で、例えば「うずめる」については、その中心的意義特徴を、〈対象(物)を何か別の手段を用いて表面から見えないようにする〉と記述してきたが、「うめる」も「うずめる」も、その手段については制約のあることに注意しておかねばならない。

構文(i)でN₂、構文(iii)でN₁に相当するものを、これまであげた例文の中から取り出してみると次の様である。

「花・土砂・人・粘土・金(gold)・砂・土・雪・泥流・火山灰」

これらは、いずれも、ほぼ同質のものがかなりの量

まとまった立体的なものと言えるであろう。従って、構文(i)の例文(12)(13)で「土砂」を「一枚の広げた布」とした次の例などは言えなくなる。

(60) ×一枚の広げた布で 穴を うめる／うずめる。

また、次の例も同様である。

(61) ×幕で 会場を うめる／うずめる。

つまり、「うめる」「うずめる」はその手段が、対象との相対的關係において膜状のものと扱えられる場合に言えなくなることが明らかとなる。そして、「うめる」「うずめる」における手段の制約を補うものが「おおう」という動詞になるようである。

3.5. 派生的用法その他

これまでも、派生的(比喩的)用法といわれるもののいくつかについては触れてきたが、それらも含めて今一度整理しておく。

(24) 水で 湯を うめる。

(25) ×水で 湯を うずめる。

(46) ×ハンカチに 顔を うめて 泣く。

(47) ハンカチに 顔を うずめて 泣く。

(62) 人から借りた金で 使い込みの穴を うめる。

(63) ×人から借りた金で 使い込みの穴を うずめる。

(46)(47)に関して前に述べたように、これらの派生的(比喩的)用法には、「うめる」と「うずめる」の意義特徴の差異がよく反映していると思われる。

(62)(63)のような例では、「使い込みの穴」に「借りた金」を充てるということがその行為の中心であって、「使い込みの穴」を「借りた金」で覆い隠すわけではないので「うずめる」が言えない。

やや特殊な用法ながら、(24)(25)の場合も上と同様の考え方が出来よう。つまり、「熱い湯」の部分に「冷たい水」を入れ込む行為なのだから。

また、派生的用法の問題からはややそれるが、複合名詞として、一方で「うめ合わせ・うめ木・うめ草・うめ立て」があり、一方で「うずみ樋・うずみ火」のあること、また複合動詞として「うめこむ」はあっても「うずめこむ」がないということも、「うめる」「うずめる」二語の意味における示差的特徴の表われと見ることができる。

4. おわりに

以上、「うめる」と「うずめる」の二語に絞って、意味・用法の分析を構文の種類とも関連して進め、その意味の差がどこに求められるかを考えてみた。その結果、既に述べたように、互いに中心的意義特徴は異に

しながらも、特に構文(i)(iii)では、二語の動詞が生じさせる結果の状態の共通性(対象(物)が表面から見えなくなるという点で一から、ほぼ同義で用いられ、意味の差が曖昧になっていることが確かめられた。ということ)は、観点をかえれば、構文(ii)においては、また「うめる」と「うずめる」の意味の差異がかなり明確に確かめられ得るということにもなる。

本稿で述べてきたことは、結論としては従来の記述を大きく出たものではないかもしれないが、分析の過程では、いくつかの新しい発見もあったように思う。もちろん、この二語については、まだ考察の余地もあろう。そして、その分析・考察をより稔り豊かなものとするためには、類義関係にあると認められる「つめる」「おおう」や、拙稿「しめる・しまる・とじる・ふさぐ・ふさがる・とぎす」(中本ゼミ1978 P.56~71)で扱った「ふさぐ」等との比較考察もまた必要に違いない。

注(1) 管見によれば、従来の辞書の記述の域を出たものとして、次の二例をあげることができる。

A. 『日本国語大辞典』第二巻595ページの「うずむ」の項

補注

「うずむ・うずめる」の基本的な意味は、「物の上に土などを盛り上げて覆う」ことであり、これに対し、「うむ・うめる」のほうは「くぼみなどに物をつめてふさぐ。また、物を土などの中に入れ込む」ことである。中にある物は、「うずむ」「うむ」のどちらの場合でも隠れて見えなくなるところから、同じような意味に用いられるようになったと思われる。(以下略)

B. 浅野百合子1970

死体でもごほうでも、まず穴を掘ってから「うめる」のである。そしてその穴状にあいたところに、何かを入れて一杯にしてくぼんでいない状態にするのが「うめる」であろう。即ち「うめる」場合、場所に着眼点があればくぼみのない状態にするという特徴がある、と言えよう。(中略)〔「うずめる」は〕「お棺を花でうずめる」「全市を花でうずめる」の例でわかるように、あいたところを何かで一杯にする、という点は、「うめる」と共通であるが、「あいたところ」が穴状であるかどうかは unmarked である。更に上に引用した二文と、「スタンドをうずめつくした大観衆」の例に共通している点は、内容物を入

れる「容器」即ち、場所が余す所なく内容物でおおわれて見えなくなるまでになる状況である。しかし、「炭を灰の中にうずめる」の場合は、内容物の方が見えなくなる、表面上にあらわれなくなる状態である。「うずめる」の対象物にはこの二面性がある。

絶対に「うめる」に言い換えられない例文、「ハンカチに顔をうずめて泣く。」が、この表面に見えないような状態にする、という特徴を最もよく示していると言えよう。

(徳川宗賢・宮島達夫1972 P. 55より引用)

注(2) この意義特徴については、次の例文で「うずめる」との違いがより明確に意識される。

(63) 地面に 棒を 半分まで うめる。

(64) 地面に 棒を 半分まで うずめる。

これは、地面に棒をさし込み始め、半分まで入った段階の表現と理解される。従って、対象(物)を土のような手段で覆いつくし、対象(物)が表面から見えないようにする」という点で、二語はほぼ共通の意義特徴を有している。構文(i)、構文(iii)における「うめる」「うずめる」の間でも同様の関係が認められる。

しかし、(63)が動作主の棒をさし込む行為そのものに着目した表現であると考えられるのに対し、(64)は、半分までさし込み、地中の部分が表面から見えなくなったこと、その状態に着目した表現と理解される。こゝでもし、(64)の方にやや言いにくさがともなうとしたら、その原因はこのような二語の本質的意味の差によるものであって、文章語的か口語的かといったレベルの間

題ではないと見るべきであろう。

注(3) 『日本国語大辞典』では、「うずめる」の意味⑥として「(③の比喩的用法) 損失や不足を補う。」があつて、これだけ見ると、(63)は言えてもよさそうである。しかし⑥の用例としてあげられているのは、(65)(66)の如き例であつて、私はこれらの例をもって「うずめる」に⑥の意味をたてるのは誤りだと考える。以下の用例は「うずめる」②の「人や物で、ある場所をいっぱいにする」に入れられるべきである。

(65) 附録は文学欄で墳(ウツ)めていて、記者は四五人の外に出でない。(森鷗外『青年』)

(66) 六つかしい漢文が曲がりくねりに半頁ばかりを埋(ウツ)めてゐる。(夏目漱石『思ひ出す事など』)

注(4) 拙稿60ページでは、「ふさぐ」の意義素を《対象物の有する空間・場所を何かで埋め、他のものの出入りする余地を残さないようにする》(下線筆者)としている。ここで私は「埋め」を「うめ」のつもりで書いている。今後、「うめる」「うずめる」との比較の際は、この意義素の設定は、「うめる」という語を使用していることから再検討されるべきであるが、ここはやはり「うずめ」ではなく「うめ」であろう。

言語経歴：1954年5月福井県武生市生まれ。
～18歳まで武生市。18歳～22歳福井県福井市。22歳～横浜市中央区在住。

しずむ・もぐる

服部 貴 義

1. はじめに

「しずむ」と「もぐる」は、かなりはっきりと使い分けられている。「海にしずむ」「海にもぐる」という時に、違いが感じられる。その違いはいったいどこから生じるのか。そしてそれぞれの動詞の特徴は何か。ここではこれらを明らかにしたい。

「しずむ」と「もぐる」は、この二語の比較だけではそれぞれの動詞の総括的な意味全体をつかむことは困難であり、もっと多くの語と比較検討しなければならない。たとえば、「おちる」「ひたる」「つかる」「かくれる」「こもる」「ひそむ」などとである。しかし、こ

こでは、この二語にしぼって考えることにした。

2. 分析

2.1. 主体・意志

- (1) 石が 水に しずむ。
- (2) 台風で 船が しずむ。
- (3) 潜水艦が 海中に しずむ。
- (4) 太陽が 地平線に しずむ。
- (5) 子供が おぼれて しずむ。

「しずむ」は主語に無情物をとるといえそうである。(5)は有情物を主語にしているようだが、